三軒茶屋
教会通り

日本キリスト教団
三軒茶屋教会
http://sanchurch.jp/

第62号　2020年8月発行
〒154-0024
東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
TEL／FAX：03-3418-4933
発行：三軒茶屋教会　広報部

聖徒の交わりを信ず
―安全・安心・安定の願いを越えて

牧師　伊藤英志

「我は、聖徒の交わりを信ず。」使徒信条の中で私たちは主日礼拝毎にそう告白している。しかし、私たちは「聖徒の交わり」を本当に信じているのだろうか。

聖徒の交わりとは、疑似家族的な和やかさや信頼関係の中で世間話を楽しめるような交わりではない。ましてや金銭を融通し合うような利得を取引する交わりでもない。

初代教会から受け継がれた使徒信条は300年以上、命懸けでの告白となった。ローマ帝国による熾烈な迫害が続いた時代、地下に潜った教会の主日礼拝には当局が仕込んだ裏切り者がいるかもしれなかった。

しかし、主イエスを救い主と告白して洗礼を受けた者たちは、キリストに結ばれた枝として互いに受け入れ合い、礼拝での交わりを信頼し合い、存続の危機を乗り越えてきた。

裏切り者の密告で信徒全員が摘発されても、「我は、聖徒の交わりを信ず」との告白を抱えて処刑場へと向かった。それはこの国のかつてのキリシタン達も同様だったはずだ。

今日の社会で重んじられているのは、安全、安心、そして安定だ。ケガや事故が起こらない安全。治安が保たれ病気も広がらない安心。予想外の出来事に翻弄されずに、"何事も起こらず"予定が計画通りに進められる安定。それらに裏打ちされた交わりは誰にとっても重要だ。

では、その「安全・安心・安定」は、誰が保証してくれるのか。

法律や規則による秩序、当局による規制や指示、古来の習慣や風習、各自の心構え、正しい知識や訓練を重ねた技能、世間の目。どれも欠くことはできないだろう。

しかしながら、整った法制度があり、高い意識を共有する社会であっても、絶対の安全、完全な安心、完璧な安定は維持しえない。

過失による事故、犯罪被害、重篤な急病や流行り病、予想外に襲いかかる災いや不幸。それらは、時代を越えて、いつ誰にでも起こり得る。

近年、この国では1年間に約130万人以上の人々が召されていく。1日平均3500人以上に及ぶ。世界でもトップレベルの医療や衛生環境、治安を誇っていながらもだ。

人間誰しも、決して死なない安全、死と全く関わらずに済む安心、ずっと死なずにいられる安定の中にいつまでも留まり続けられはしない。

だからこそ同信の者や愛する者との交わりを通して、迫る不安や懸念を打ち消す魂の安全と安心、魂の安定に留まれるのではないだろうか。

確かに教会であってもウマが合わない人や気に入らない人もいよう。「何でこんな人が信徒なのか」という声も挙げたくもなるかもしれない。

しかし「聖徒の交わり」は、キリスト者の人柄や人望によって定まりはしない。その交わりは、あくまで「たとえそんな人がいても、我はこの交わりを信じる」営みなのだ。

不届き者や自分を顧みない者が隣にいるかもしれない。しかし、その全てを神の判断に委ねる。さらに自分自身をも神に託そうとする。その交わりの中にこそ、神のご意志が見える形となって現れ出る。

聖徒の交わりを信じるその信仰は、人間が願い求める安全・安心・安定、さらに死の現実を越えた聖なる恵みである。そこにこそ神の御旨を映し出す舞台が組まれていく。